

明治 24 年池田章政邸行幸時の邸宅の使用方法について

池田 直也（神奈川大学）

1. はじめに

明治時代、天皇は各地の視察を目的に、軍施設や工場などを訪れる「行幸」という行為を行なった。行幸は前述した施設に限らず、臣下との交流を目的に、私邸に対しても行われた。私邸に対する行幸について、内田青蔵は「伝統衣装から洋装化した天皇をお迎えする行幸御殿は洋館がふさわしいという考えが生まれ、それが強い牽引力となって上流層の間に洋館を建設する機運が高まり、上流層の新しい住宅形式である和洋館並列型住宅が誕生した…」¹⁾と述べ実際に行幸に合わせて洋館建設が行われていたことを指摘している²⁾。行幸と邸宅の関係については研究が行われ、主に様式や建築年代から関係を推察しているが、行幸時の使用方法からその関係を考察する研究はあまり行われていない。そこで、本稿は、行幸時の行動記録と図面の両方を収集することができた池田章政邸行幸時の邸宅の使用方法を通して、行幸と邸宅の関係を明らかにすることを目的とする。

2. 研究資料

行幸記録、図面共に岡山大学附属図書館所蔵『池田家文庫』³⁾内の資料を使用した。

3. 池田邸について

池田邸は大崎（現在の品川区）に存在していた。その様式について、図1の平面図をみると、和館と洋館の両方が存在しており、それらが廊下で繋がれていることから、池田邸は和洋館並列型住宅であったことが明らかになった。

和館、洋館ともに設計者や詳細な建築年代などについては現時点で明らかではないが、「売買約定證書草案」内に「池田章政の大崎村邸宅築造中即ち当明治 21 年 12 月より来る明治 23 年 6 月…」⁴⁾とあり、また明治 24 年 8 月 4 日の読売新聞に「大崎村の新邸に引き移りさり」⁵⁾とあることから、明治 21 年 12 月時点で既に邸宅の建設が開始されており、同 24 年 7 月頃に竣工していたと考えられる。建築年代の観点からみると、行幸の直前に邸宅が竣工していることから、行幸に向けて洋館と和館を新築した可能性が考えられる。

池田邸の図面は和館、洋館ともに 2 種類存在しており、それぞれ少しずつ建物の平面が相違している。このことから、元々あった和館に洋館を増築したのではなく、和洋館ともに新築されたことがうかがえる。和館に関しては室名の記載は確認できなかったが、洋館の図面（図 2, 3）には室名が記載されていた（凡例に示す）。

洋館の 1 階には御客間・御書齋・御膳所・饗宴所・球戯場が配置されており、主に接客空間として使用されていたことがうかがえる。明治期の洋館には台所が設けられていない事例が存在するが、池田邸には 1 階に 3 坪の御膳所 (F) が設けられている。ただし、その規模から、あくまで池田家の私的な台所であって、行幸時のように大人数の食事を用意する際には、和館の台所を使用していたのではないかと推察される。

2 階には御客間・大奥御居間・御居間・御寝室・寝室・侍女詰所・化粧室が配置されており、1 階と比べると私的な空間として使用されていたことが考えられる。



図1 池田邸平面図⁶⁾

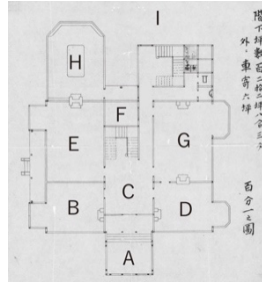


図2 洋館1階平面図⁷⁾

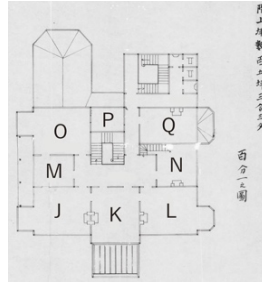


図3 洋館2階平面図⁸⁾

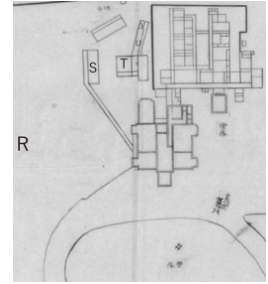


図4 池田邸配置図⁹⁾



図5 池田邸外観写真¹⁰⁾

- A:車寄せ B:御客間 C:御広間 D:御書斎 E:御客間 F:御膳所
 G:御饗宴所 H:球戯場 I:表座敷 (和館) J:御居間 K:御客間
 L:御寝室 M:御化粧ノ間 N:侍女詰所 O:大奥居間 P:御化粧ノ間 Q:寝室
 R:庭園 (烟火打上場) S:能楽御覧所 T:能舞台 U:橋掛り V:鏡の間

4. 池田邸行幸の内容と邸宅の使用方法について

池田邸への行幸は明治24年11月16日に行われた。行幸当日、池田は車寄せにて天皇の奉迎を行い、自ら便殿へ先導し、そこで拝謁、献上、茶菓を行った。その後庭園(R)を散歩し、能楽御覧所(S)で能楽、和館の表座敷(I)で講談を行い天皇をもてなした。

当日の行動順序をまとめると、車寄せ→便殿→庭園→便殿→能楽御覧所→便殿→饗宴所→便殿→表座敷→便殿→車寄せとなっており、便殿と行事の会場を往復するように行動していたことが確認できる。また、庭園散歩、能楽、講談以外の行動は洋館で行われており、和館は表座敷のみしか使用されていないことから、行幸時においては洋館が主たる滞在場所として考えられており、和館は行事の会場として使用されていたことがうかがえる。

5. まとめ

明治24年に行幸が行われた池田邸は、新築の和洋館並列型住宅であったことが明らかになった。行幸時の使用方法をみると、洋館には便殿が置かれ、晩餐会も行われ、能舞台も洋館から接続されていたのに対し、和館は表座敷が講談の会場として使用されたのみであった。このことから、洋館の竣工時期と行幸時期の関係だけではなく、行幸時の使用方法という観点からみても、行幸時、和館は行事の会場や準備空間として使用されており、天皇を迎える行幸御殿としては洋館が相応しいと認識されていたことが推察される。

6. 注釈

1) 内田青蔵「洋館建設と行幸について—和洋館並列型住宅の誕生の背景—」『清泉文苑』清泉女子大学人文科学研究科, pp. 43-51, 2017年 2) 内田青蔵『日本の近代住宅』鹿島出版会, 1992年 3) 岡山大学附属図書館所蔵「C6-433 明治天皇行幸書類」『池田家文庫』4) 岡山大学附属図書館所蔵「C-12 292-2 売買約定證書草案」『池田家文庫』5) 明治24年8月4日火曜日 3p 読売新聞朝刊 6) 岡山大学附属図書館所蔵「T5-156-19 大崎邸建造物平面図」『池田家文庫』7) 岡山大学附属図書館所蔵「T5-156-28-3 大崎邸西洋館階下平面図百分之一図」『池田家文庫』8) 岡山大学附属図書館所蔵「T5-156-28-2 大崎邸西洋館平面百分之一図」『池田家文庫』9) 岡山大学附属図書館所蔵「T5-156-23 大崎邸敷地建物図」『池田家文庫』※岡山大学には洋館と和館それぞれ2種類の図面があり、最終案がどちらかは判断ができなかったが、行幸時に行われた能舞台が描写されていたことと楽隊という文字からこの図面が行幸時に使用されたものであると判断した。

10) 杉謙二編『華族画報下』吉川弘文館, p587, 2011年